

『釈論愚草』における頼瑠の一体一心摩訶衍解釈

豊嶋 悠 吾

一 はじめに

『釈摩訶衍論』（以下『釈論』と称す）は『大乘起信論』の注釈書であり、空海が真言教学をたてる論拠として用いたため、後世に『釈論』の注釈書が多く書かれたが、頼瑠（二二六―一三〇四）も『釈論開解鈔』と『釈論愚草』を残している。『釈論開解鈔』は『釈論』全体を注釈したものであり、『釈論愚草』は『釈論』に関する伝法会談義に際し行われた議論の内容を頼瑠が編纂したものである。⁽¹⁾ 頼瑠の著作スタイルは加筆添削、再治を重ねるものであり、成立年代を簡単に比較できるものではない。『釈論開解鈔』では巻八に弘長二年（一二六二）の奥書が初めて見られ、最後の巻三十六に文永十年（一二七三）の奥書が残っている。『釈論愚草』では巻二中に弘安六年（二二八三）の最初の奥書があり、巻六に亡くなる前年（二二八三）に当たる乾元二年（二二〇三）の奥書が見られ、巻七以降は書名も異なり頼瑠の死後における証義者名と日数が確認できる。⁽²⁾ このことから全般に『釈論愚草』は『釈論開解鈔』の後にまとめられたといえようが、さらなる検討が必要である。

頼瑠の『釈論』解釈は覚鑒に負うところが多い。その一方で、空海の著作に準じて統一を図る面も見られる。『釈論愚草』は談義の記録であり、当時議論されていた問題点とそれをどのように解決していったかという経緯を見る上で『釈論愚草』は『釈論開解鈔』よりも勝れた資料といえるが、未刊行のこともありその研究は少ないのが現状である。『釈論愚草』では様々な議論がなされているが、特に一体一心摩訶衍が関わる第九住心と真如門をめぐる問題は、頼瑠

が覚鑊の解釈をどのように受け入れていったかを検討する際に、格好の材料といえる。ここでは一体一心摩訶衍をめぐる議論から、覚鑊から頼瑤への『釈論』解釈の変遷を確認し、頼瑤の『釈論』解釈の姿勢を検討したい。

二 第九住心をめぐる問題点

『釈論』では『大乘起信論』の一心二門三大の構造から三十三種類の法門を立てる特徴がある。三十三法門とは、一心と三大それぞれに生滅と真如の二門を認め、さらに機根の利鈍で前後に分けるために、前重の八所入法・八能入門と後重の八所入法と八能入門の三十二法門に分類される。さらに機根・教説を離れた絶対の不二摩訶衍を設けて計三十三種の法門となる。その三十三法門を利用して空海は『弁顯密二教論』や『十住心論』で密教の優位を述べたところから、この三十三法門は真言教学において重要視されることとなった。実際に後代の『釈論』の注釈書は三十三法門に関する立義分についてのみ解説する小部のもが多く、全体を注釈するようになったのは頼瑤の『釈論開解鈔』が初めてである。^③空海は『秘蔵宝鑰』で『釈論』の五重問答を利用して、三十三法門のうち不二摩訶衍を密教、前重一心の所入法である三自一心摩訶衍を華嚴に当てはめる解釈を行った。このことから三十三法門と十住心との対応関係が問題となっていく。そのうち華嚴に当たる第九住心では、対応する三自一心摩訶衍が生滅門の所入法であるため、真如門の所入法である一体一心摩訶衍は第九住心に当たるのか、また第十住心に当たるのかという議論が起こった。この一体一心摩訶衍をめぐる議論は卷一下の論題四「一体一心摩訶衍第九住心分齊歟事」、卷三下の論題三十一「付明二四種大義」且宗家意初二大義但可レ云レ証第九住心耶」で主に取り上げられている。これらの論題を見ると、空海の解釈の中に第九住心を生滅門のみとする解釈と真如門を含むと思える解釈とが混在しており、そこが議論の対象となっていることが分かる。今『釈論愚草』卷一下と卷三下の議論に従って論点をまとめると、次の通りである。

【生滅門のみとする根拠】

『釈論愚草』における頼瑠の一体一心摩訶衍解釈（豊嶋）

(1) 五重問答：『秘藏宝鑰』巻下の第九住心で、『釈論』の五重問答のうち四番目の問答で三自一心摩訶衍を第九住心に配当している。（『弘大全』一・四六五頁）

(2) 四種鏡：『十住心論』巻九に『釈論』巻三の四種鏡の文（大正三一・六二二下）を引用して「仏華所説三種世間円融之仏則四種鏡中当_三第二_二也」（『弘大全』一・三九〇頁）とあり、華嚴を『釈論』の四種鏡に配するうち生滅門の第二鏡に配当している。

(3) 九識：『十住心論』の巻十に「一道極無但知_三九識_二」（『弘大全』一・三九八頁）とあり、第八一道無為心と第九極無自性心は『釈論』巻二で述べられる十識のうち生滅門の九種の識だけ知っていると述べている。

(4) 盧舎那仏：『十住心論』巻九で『釈論』巻十の華嚴の盧舎那仏を三種世間を身心とするという解釈（大正三一・六六八）をあげており（『弘大全』一・三九三―三九四頁）、先の三世間を生滅門、出世間を真如門とする解釈と合わさって華嚴は生滅門のみととらえられる。

(5) 重如月殿：『教王経開題』に「双円性海常談_二四曼自性_一、重如月殿恒説_三三密自樂_二」（『弘大全』一・七一六頁）とあり、『釈論』巻二の五種言説のうち真如門に当たる重如（如義言説）が三密を説くとしている。

(6) 六重本覚：『法華経開題』（重円性海）で「妙法」を解釈する際に、六重の本覚をあげ、そこで顕密の二門に区分する解釈をあげているが、一如本覚妙法を秘密とする解釈が見られる。⁽⁴⁾

これらの解釈は第九住心を生滅門のみととらえ真如門を密教に位置づける根拠とされる。それに対し、『二教論』や『秘藏宝鑰』に第九住心に真如門も認める解釈も見られる。

【真如門を含むとする解釈】

(一) 『二教論』巻九で「三種円融優_三遊二門境_二」（『弘大全』一・三八九頁）とあり、第九住心は二門（生滅門・真如門）の境界であると解釈する。

(二)『秘藏宝鑰』卷下の第九住心の解釈で「風水龍王一法界 真如生滅歸_レ此_レ岑_レ」(『弘大全』一・四六二頁)とし、真如門と生滅門を第九住心の歸する所としている。

(三)『十住心論』巻九で『釈論』巻一の撰不撰の文(大正三三・六〇二)をあげ、不二と真如と生滅の諸仏を区別しており(『弘大全』一・三九四―三九六頁)、不二摩訶衍が密教である以上真如門の諸仏は生滅門の諸仏と同じく顕教と位置づけられる。

以上が第九住心に真如門を認める、言い換えれば不二摩訶衍のみを密教とする解釈である。続いて『釈論愚草』の議論で、これらの相反する解釈をどのように会通したかを見ていく。

三 『釈論愚草』における会通

『釈論愚草』では、真如門の一体一心摩訶衍について、巻一下では「此事古来異義。末学雖_レ難_レ定、且依_レ相承伝_レ者、可_レ第九住心分齊_レ也」と古来より異義の多い問題であることわけてはおり、巻三下では「此事古来難義。学者学者不同。或云_二三種俱証_一。或俱云_レ当_二第二鏡_一。二伝可_レ有也。」と二説をあげているものの、顕教の第九住心とする解釈を採用している。その根拠は、空海が『秘藏宝鑰』の五重問答で不二摩訶衍を密教に当てはめていることと、また(三)の撰不撰の引用が根拠となっており、覚鑊の解釈も準じてあげられている。したがって、『釈論愚草』においては、生滅門とする(1)～(5)について会通する必要が生じ、議論されている。

(1)五重問答の会通

①五重問答引_二証釈論_一中三十三中抽_二其至要_一、判_二五箇淺深_一。是示_二五宗優劣_一故、大師引証給。然一体一心不_レ遮_レ撰_二第九_一也。(巻一下)

②又宝鑰釈者、風水龍王所入体所_レ出風水雖_二染浄法_一、隨_レ義転_レ用示_二第九住心撰真如生滅二法之義_一也。例如_下依_二一心法_一有_二中二種門_上矣。(巻一下)

『釈論愚草』における頼瑠の一体一心摩訶衍解釈（豊嶋）

五重問答で三自一心摩訶衍をあげている点に関しては、①で五宗の優劣を判じているだけで、一体一心摩訶衍を入れていないわけではないと答えている。また、②は(二)に関して風水龍王は後重一心の生滅門の説明であるという難に対する回答であるが、随義転用の点で説明している。

(2) 四種鏡の会通

①四種大鏡文者、挙_二四鏡中第一第二配_二真如生滅_一畢、云_下次二種鏡於_二此住心_一無_レ用故不_レ出。定知、真如門法又今住心所用云事。若爾、優_二遊二門_一釈何云_二隨一_一乎。故次上釈云、然猶於_二二門_一真如作_二究竟之説_一矣。華嚴又以_二一体理_一非_レ云_レ爲_二究極_一乎。(卷一下)

②次宝鑰中但引_二第二鏡_一者、挙_レ一顯_レ一歟。或又約_レ勝也。(卷三下)

③次至_下当_二第二_一也釈_上者、二種鏡雖_レ証_二第九_一、且約_レ正付_レ勝作_二此釈_一歟。依_レ之具引_二初二文_一畢釈、次二種鏡於_二此住心_一無_レ用故不_レ出文。此釈意非_レ顯_二初二種鏡_一今住心所用_二乎_一。(卷三下)

四種鏡で生滅門の第二鏡とする解釈に関しては、後の二種鏡を無用としている点から推測して真如門の第一鏡も第九住心の所用であると答え、またより適した生滅門だけ当てはめたとする解釈をおこなっている。

(3) 九識の会通

①次但知_二九識_一者、顯家所談識体不_レ過_二九識_一故云_レ爾。以_二真門_一非_レ不_二第九攝_一。離言真如即顯教分齊故。(卷一下)

②又誠華嚴所立第九識雖_二生滅門攝_一、以_二十種心量_一定_二顯密識淺深_一時、三乘一乘悉攝_二九種心量_一。以_二一一心_一爲_二第十住心_一也。二教論言語心量離不離之義、此論明說者即此意矣。(卷一下)

③但於_レ云_二唯釈_一四法内十種心量_一者、因_下釈_二四法_一之便、尽_二三十三法門_一立_二五言十心_一也。例如四法熏生文有_二五重問答_一也。所以離心離言真如門云云。云_二因海真如門即顯_一也。以_二如義_一一一心縁_二詮_一彼理_一即作_二密藏本分_一也。宗家諸教絶_二離密藏本分_一云云。此意也。(卷一下)

九識の問題に関しては、九識は生滅門、第十識は真如門であるが、顯密教判の時には九識が顯教、第十識が密教であり、

真如門であろうと因分であれば顕教であると説明している。

(4) 盧舍那仏の会通

①過三種世間^一釈者、彼宗意於^二十地三世間^一成^二因果二分義^一。若爾者、不二果分猶於^二三世間^一論^レ之。況真如門豈非^二三世間^一撰^二乎。但過言^二三世間重々故事理相望^二此釈^一一往釈也。生滅事法界、真如理法界、事理法界非^二盧舍那所知^一乎。

(卷一下)

②次出^二過三種世間^一等釈者、彼宗意於^二十地三世間^一成^二因果一分義^一故。果分猶於^二三世間^一論^レ之。況真門寧非^二三世間^一法乎。三世間重重故真如三世間超^二生滅三世間^一故云^レ過。今論第十云、雖^レ撰^二三世間^一而撰不撰。非^レ云^下雖^レ撰^二因分三世間^一不^レ撰^二果分三世間^一乎。真如既因分撰。寧非^二盧遮那所撰三世間^一乎。何況生滅事法界真如理法界也。事理法界豈非^二舍那所知^一乎。(卷三下)

盧舍那仏が生滅門の三種世間を身体とする問題に関しては、華嚴教學で三世間において因果を説明しているに過ぎないため、真如門も三世間の内であると答えている。

(5) 重如月殿の会通

①次於^二双円重如釈^一者、此秘宗骨目伝法印信故、宗家諸開題中多置^二此言^一給。先徳或云、声字実相窮^二性海之深理^一。法三大羯振^二本地之高徳^一云云。即此又述^二此意^一歟。既云^レ説^二三密自樂^一。以^二如義^一説^二真門理^一成^二性海三密^一故、云^二声字実相窮^一性海深理^一也。是則答者潤色者歟。(卷一下)

②次双如一心者、彼指^二一一心^一云^二双如一心^一故。彼本果海心故。非^二九種心識四種言語境^一故、云^レ爾。此又答者潤色也。(卷一下)

重如月殿の問題に関しては、①で密教の骨目伝法の秘密であり、諸開題の中で多く用いられる表現として、覺鑒を引用してその根拠としている。また②は重難で『法華開題』(重円性海)の「双如一心非^二言心之境^一」(『弘大全』一・七六八頁)を根拠に「双如」は密教ではないという質問への回答である。ここでは、双如一心は一一心を指し、一一心は果分密教の心

『釈論愚草』における頼瑡の一体一心摩訶衍解釈（豊嶋）

であり、九種の心・四種言語の境界ではない意味だとしている。①②のどちらも表現上の潤色として回答している点に（5）の特徴がある。

（6）六重本覚の会通

重難云、法華開題立_二六重本覚_一、以_二一如不二_一為_レ密見。先徳釈中十六生滅為_レ顯十七為_レ密見。此豈以_二真如門法_一非_レ属_レ密乎。

答。指事釈重々配分一往釈也。非_二理実談_一。彼釈又云_二顯中秘_一也。下釈問_下華嚴与_二三十二因海_一有_二差別_一耶、而答_二同顯教分齊故同無明分位故_一矣。六重本覚文_二教論重重秘密意_一。非_レ云_二法身所説秘_一也。（卷一下）

六重本覚に関しては、覚鑊の解釈も根拠としてあげられて問題となっている。ここでは重々の秘密であり、法身所説の正しい秘密ではない顯中の秘密と回答している。

以上の会通を見ると、特に（1）（3）の点に関して、『釈論』本論の真如門・生滅門の内容よりも、顯密教判の立場を優先して、不二_二密教_一、三十二_二顯教_一の相違を崩すまいとしていることが分かる。^⑤この顯密教判を優先する解釈は、二門分別の議論の所でも確認できる。

四 『釈論愚草』における二門分別の議論

真如門・生滅門に関しては三門分別と二門分別とがある。三門分別とは不二・真如・生滅の三つに区分する解釈で、この場合は不二が密教、真如・生滅が顯教である。しかし、二門分別では真如門の位置づけが問題となり、不二と真如を一つにまとめて生滅に対するとする考え方と、真如を生滅の方にまとめて不二と対する考え方と両方あり、定まっていない。前者の場合は、真如門を密教と考え、後者の場合は真如門を顯教ととらえることとなり、一体一心摩訶衍の解釈にも影響を与える。以下に卷三下の論題からその部分を引用し、どちらの説を採用しているか確認したい。

問、以_二今論三十三法門_一分_二別顯密_一時、二門三門是異。二門分別時以_二真如門法_一悉為_二真言_一見。前重三大并後重一

心三大中真如門法猶以為第十心。何況出一体一心乎。依之十種心量中以九種心為顯教、以一心為密藏。是豈非真如門法為第十住心乎。是以住心論判住心心識時、一道極無但知九識文。若以一心所入属第九者、非違但知九識之積乎。以此等義大師宝鑰中輪花能出体大小。器疏正覺極甚深文。此即以表三自門第二鏡、独成極無義非乎。又通法大師五重問答無明之時、以真如門法判明分位。自叶宗家釈義乎。

①答、二門分別者以不二為真如門、以三十二為生滅門也。故先德釈云、不二是真言常住、三十二即生滅無常文。十種心量合三十二立十心言也。故一心如義語自性法身言心也。縁詮法仏三密曼荼四身言心。誰云因海言心乎。若許者、違第一卷得不説・第十撰不文故。但至但知九識者、十種心量中八識分齊也。庵摩羅云第九故。故知、因海一心九種心量分齊故、不縁法仏三密也。宝鑰釈者、約三世間莊嚴義同辺且拏第二也。非遮第一也。次通法釈者、不知密釈故、不及苦勞。付中、彼釈不二云非明非無明。異大師釈乎。無際大師釈中三十二判無明分位。自契大師釈乎。二門分別三門分別重重難破如別鈔。

②或云、指事中華嚴与因海相對判異時、彼説九識、此説十識故云云。此釈意一心識因分撰見乎。況二教論引解釈一法二門文為顯密分別之証、以真如為密以生滅為顯非乎。

③私云、於真如門成離言離心談因海真門也。以如義一心縁護彼離言真如成密藏本分故非自分撰也。

故能説能縁言心是不二門心念也。指事一心為極者、釈論不二心為極故云爾也。若不爾者、何云此説多理智乎。理理無辺真言談故。若因海許此義者、何判門時云能説応化同等乎。(卷三下)

『釈論愚草』では、問者の立場は不二と真如をまとめてとらえる考え方であり、①の答者は不二を真如、三十二を生滅ととらえる考え方であり、覺鑊の解釈(二十五不二真如常住。三十二生滅無常。『釈論指事』『興教大師全集』上、九二頁)を根拠にあげている。また一一心・如義語に関しては、自性法身の言心であり果分に属し、九識の問題に関しては、因分の一一心は八識に収められるものであり、密教の一一心とは異なると答えている。それに対し、②では、覺鑊の『釈論指事』の華嚴と三十二因分の相違に関する一一心を因分とする解釈をあげて不二を真如、生滅を三十二とする二門分別に

対して疑義を呈している。③の頼瑠の意見は、②に対する回答であり、覚鑠の『釈論指事』に対する会通である。頼瑠は離言離心の段階は因分の真如門であり、如義語・一一心によって離言の真如を護ることが密教の部分であり、因分の範囲から逸脱しているとして、一一心・如義語は密教の能入門（不二門）に当たるとしている。したがって、頼瑠の立場も答者と同じく不二を密教、三十二を因分とし、一一心・如義語を密教とする二門分別の立場に立つことが分かる。

このように第九住心に関して真如門を含むかという問題は、空海の解釈そのものに由来しているものの、同様に覚鑠の解釈に関しても議論されている。それは覚鑠の解釈の多義性に由来するものであるが、『釈論愚草』では覚鑠の解釈も根拠となるため、覚鑠の解釈に関しても会通が必要となった。次に覚鑠の解釈の多様性とそれに対する『釈論愚草』の会通を確認したい。

五 覚鑠の三十三法門解釈

覚鑠の『釈論』の注釈書には『釈論指事』と『釈論愚案鈔』とがある。『釈論指事』は『釈論』巻一を逐一注釈した書であり、『釈論愚案鈔』は『釈論』の内容を金胎の両面から密教的に解釈したものである。一体一心摩訶衍を第九住心とする根拠は、『釈論指事』の「就浅略三十二種顕教修行種因海応化身諸説也。不二大乘密教性徳円円海法身諸説也」（『興教大師全集』上、七二頁）の文である。しかし、「就浅略」とあるように、これは三重の解釈の初めに過ぎず、その後の「就深秘門」では真如門を真言、生滅門を顕教とし、第十住心の分齊とする解釈をあげたり、さらに「就秘中深秘門」では不二・真如・生滅の三門を仏・蓮・金に当てたり、三十三法門を三十七尊に当てる解釈をしたりしている。このような多重的な解釈は、覚鑠の注釈書全般に見られるものであり、覚鑠の『釈論』解釈の一番の特徴といってもよい。したがって、『釈論愚草』では覚鑠の解釈を根拠にあげてはいるものの、空海の解釈と同様に覚鑠の解釈も統一を図る必要があった。

『釈論愚草』では『釈論指事』の「二者第十住心浅略也」の部分と六重本覚であげられた「十六生滅為顕十七為密」

とする解釈、二門分別であげられている華嚴と三十二因分の同異の部分が議論されている。

「二者第十住心浅略也」の問題

【釈論指事】

問、前重一心法界十住心中何所攝耶。答、有二義。一者第九住心所攝也。二者第十住心浅略也。『興教大師全集』上、九五頁。

【釈論愚草】

次先德釈有「二釈」中第二釈也。彼意顯家極理同「真言初門」故云爾歟。住心論云、望「前顯教極果」於「後秘心」初心矣。（卷一下）

次先德釈者、彼存「二義」中第二義也。第一義云「第九住心所攝也」云云。此第九住心同「第十住心菩提心為」因故云爾。以「一体」直為「第十心」非也。（卷三下）

卷一下では第二釈であつて、顯教の極理は真言の初門と同じであるからこのような解釈をしたと述べ、卷三下ではこれは二番目の義であり第一義に第九住心の攝とし、第九住心は第十住心の菩提心を因とするからこのような解釈をあげたのであつて、直接一体一心摩訶衍を第十住心としたわけではないと会通している。

「十六生滅為顯十七為密」の問題

【釈論指事】

就「深秘門」有「三重」。兩重一法界心是心真如門。是則真言也。兩重三大義則生滅門。皆是種因海。復次於「一心法界三大義」有「真如生滅二法門」。其真如是真言。生滅則顯教。此復各有「二義」。一者顯中之秘。二者皆第十住心之分齊也。非「九種住心之秘密」。復次能入門顯教。所入法真言。『興教大師全集』上、七二頁。

【釈論愚草】

答。指事釈重々配分一往釈也。非_二理実談_一。彼釈又云_二顯中秘_一也。（卷二下）

これは第二義の真如を真言、生滅を顯教とする解釈に対する回答であるが、『釈論指事』の解釈は様々ある一応の解釈であり、理実ではなく、顯中秘といっていると答えている。しかし、覚鑠は第十住心の分齊とする第二義もあげており、こちらに関しては触れられていない。

華嚴と三十二因分の問題

【釈論指事】

問、華嚴与_二三十二因海_一有_二差別_一耶。答、有_レ同。有_レ異。同者、能説応化同故。同無明分位故。同一心為_二究竟_一故。同縁起因分故。同称_二不二不可説_一故。同顯教分齊故。異者、彼説_二九識_一、此説_二十識_一故。彼後住心不_レ知。此知_二後住心_一故。彼以_二多一心為_レ極_一。此以_二一心為_レ極_一。彼但淺略無明分位。此通_二淺深_一無明。彼以_二自位為_レ極_一。此以_二自位為_レ無明分位_一。…（『興教大師全集』上、九四―九五頁）

【釈論愚草】

下釈問_二華嚴与_二三十二因海_一有_二差別_一耶_上、而答_二同顯教分齊故同無明分位故_一矣。（卷二下）
指事一一心為_レ極者、釈論不二心為_レ極故云_レ爾也。（卷三下）

華嚴と三十二因分の問題では、覚鑠は同異をあげて説明している。そのうち、三十二因分が一心を知っていることが問題とされている。『釈論愚草』巻二下では同の解釈で顯教と同じ、無明の分位である点から反論し、また巻三下では頼瑠は因分は一心を極とするが、『釈論』では密教にあたる不二を極とする点で劣っていると述べている。

このように覚鑠の三十三法門の解釈はいまだ様々な解釈を認める試行錯誤の状況であることが分かる。それに対して頼瑠は『釈論愚草』の議論の中で、不二を密教、三十二を顯教とする顯密教判の解釈に沿って覚鑠の解釈を取捨選択し

統一しようとしている。

六 結 論

以上のことから一体一心摩訶衍、言い換えれば前重一心の真如門を密教とするか顕教とするかという問題に関して『釈論愚草』巻一下・巻三下の議論を通して詳細な検討を試みた。『釈論愚草』では異説があるとしながらも顕教の第九住心に位置づける解釈に基づいて会通がなされていた。これは、九識の会通からも分かるように、不二を密教、三十二を顕教とする顕密教判に立つ姿勢に基づくものであり、『釈論』本論の二門解釈よりも空海の『二教論』解釈を優先させた結果といえよう。さらに本多隆仁氏も既に指摘しているように『開解鈔』においても顕密対弁をもととした二門分別の立場が見られ、顕密対弁の姿勢がその根底にあるといえる。また根拠として覚鑊の『釈論指事』も用いられているが、その議論を見ると、覚鑊の解釈においてもまだ真如門を密教とする解釈も見られ会通が図られていた。このように、覚鑊の解釈はさまざまな三十三法門のあり方を許すものであり、一体一心摩訶衍解釈をめぐる問題でも空海の解釈の会通と同様に覚鑊の解釈も顕密教判の立場から会通が行われている。頼瑠が覚鑊の三十三法門に関する多重的な解釈を顕密教判の立場から統一しようとする傾向は、根本摩訶衍の解釈においても見られ(豊嶋悠吾「『釈摩訶衍論開解鈔』における頼瑠の根本摩訶衍解釈」『印度学仏教学研究』五八(二)、二〇〇九)、一体一心摩訶衍に関して同様の態度が認められることから、頼瑠の『釈論』解釈に共通する態度と考えられる。今回は一体一心摩訶衍をめぐる論題二点から顕密対弁思想に基づく頼瑠の解釈が確認できた。しかし、一体と三自の所入法に関する藤田隆乗氏の指摘や『金剛頂経開題愚草』における本多隆仁氏の指摘にもあるように、頼瑠の真如門と生滅門の解釈に関しては、『釈論愚草』全体における検討を要する問題であり、今後の課題としたい。

註

『釈論愚草』における頼瑠の一体一心摩訶衍解釈（豊嶋）

(1) 『釈論愚草』は、写本と版本が残っており、写本には①高野山金剛三昧院(第一中・下・第五上、永享六写三帖)、②高野山三宝院(二二冊)、③高野山宝亀院(二二冊)、④高野山宝寿院(明応四写二二冊)、⑤輪王寺天海(第一上・中・下・第三下・第五下、文明一九深恵写五冊)、⑥大須文庫(第三中、一冊)(第一下・三上中下・四下・五上中下・六上中、十冊)が確認できる。また、版本は高野山宝城院、成田、カリフォルニア大学(近世中期)に残っており、今回は智積院所蔵の万治二年(一六五九)に前川茂右衛門が発行した江戸時代の版本(完存)を底本とした。

(2) 『釈論愚草』の巻数は『釈論』に準ずるものである。最後の四巻の名称が異なる点に関しては、一時期散逸したためと考えられる(藤田隆乗「『釈摩訶衍論』論義書をめぐる諸問題」『密教学研究』二八、一九九六)。なお、『国書総目録』では成立年代を『開解鈔』は建長八年(一二五六)、『釈論愚草』は弘安十年(一二八七)としている(奈良弘元「頼瑠僧正の著作をめぐって」『新義真言教学の研究 頼瑠僧正七百年御遠忌記念論集』、二〇〇二)。

(3) 『仏書解説大辞典』では、済暹に『釈論顯秘鈔』という『釈論』の注釈書の名前が確認でき、巻数から全体の注釈書と推察されるが、残念ながら現存していないため、詳細は不明である。

(4) 「謂妙法者且有六重浅深。一染浄本覚妙法。二清浄本覚妙法。三一心法界本覚妙法。四三自本覚妙法。五一如本覚妙法。六不二本覚妙法。就此六重且分顯密妙法者、初五顯後一密妙法。又前五中初四顯後一秘。又四本覚中更有顯秘。初顯後秘。如次可知。」(『弘大全』一・七六九頁)この六重本覚に関しては、染浄本覚妙法を『法華経』に当たると解釈しており、五重問答で一心(本覚妙法)が第八住心に当たる解釈と齟齬が生じる問題もある(中村本然「『釈摩訶衍論』の五重問答について」『智山学報』第五十六輯、二〇〇七)。

(5) 真如門と生滅門の所入法に関して同一であるか、別々であるかという議論もされており(巻一下「証三自大乘時即得一体大乘歟事」)、そこでは「二門峙立」と「從權入実」の二つの解釈があげられている。「二門峙立」とは、生滅の三自を証する時に真如の一心も証する所入法は同一である立場であり、不二と因分を区別する二門分別の解釈である。「從權入実」は頓漸の機根に応じて区別し生滅の所入法から真如の所入法へと至る不二と真如、生滅を分ける三門分別の解釈である。この問題に関して頼瑠は二説をあげるがどちらを採用するかは明確にしていない(藤田隆乗「『釈摩訶衍論』における論議の一考察―「二門峙立」を中心として―」『智山学報』三六、一九八七)。また、『釈論開解鈔』でも如義言説をめぐって花遊院と

蓮花院の説をあげて二門分別・三門分別をとりあげている。頼瑠が二門分別で不二を密教、因分を顯教とする解釈に立つものの、『金剛頂經開題愚草』では四重秘釈で第四重の密教の段階では如義言説は関わらないという解釈も示しているように真如門と如義言説に関する問題は複雑である（本多隆仁「頼瑠の如義言説解釈―顯密対弁思想を中心として―」『新義真言教学の研究』頼瑠僧正七百年御遠忌記念論集、二〇〇二）。

〈キーワード〉 頼瑠、覚鑊、釈論愚草、一体一心摩訶衍、二門分別、三門分別